

日本の「国民皆保険」は国民の財産

医療介護福祉政策研究フォーラム理事長 中村 秀一

2012年11月16日
朝日新聞

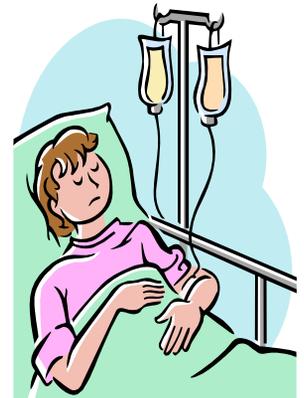
保険証を持っていけばどの医療機関にでもかかれ、たいていの医療が保険で提供されるということは国際的に高く評価されているが、わが国民には空気のようにあたりまえで「ありがたみ」が理解されていない。

ありがたさ、当たり前ではない！

皆保険で医療は安くて当たり前だという錯覚を生んでしまった。医療は受けやすくなったあまり、その大切さへの実感が失われ感謝の念が後退したことも大きな問題。

わが国民一人当たりの年間受診回数は13、1回でドイツの8、4回、フランスの6、7回、イギリスの5回、米国の3、9回、スエーデンの2、9回に比べて断然に多い。

わが国では医療をけなす言葉として「3時間まって3分診療」があるが、実は3時間まてば医師にもらえるということは、国際的にみれば褒め言葉だ。



米国では公的な医療保険制度が整備されていない。数千万人が無保険者で、経済的理由で、経済的理由で医療が受けられないことが問題になっている。

スエーデンでは医療費は無料に近いが、一週間以内に医師にみてもらえるようにすることが医療政策の目標になっている。スエーデンでは病院には直接行けないこと。診療所は予約制で、看護師が間に入り医師にすぐにはとりついでくれない。

患者がどの医療機関にも飛び込める「フリーアクセス」もわが国では当たり前と考えられているが国際的には少数派。

